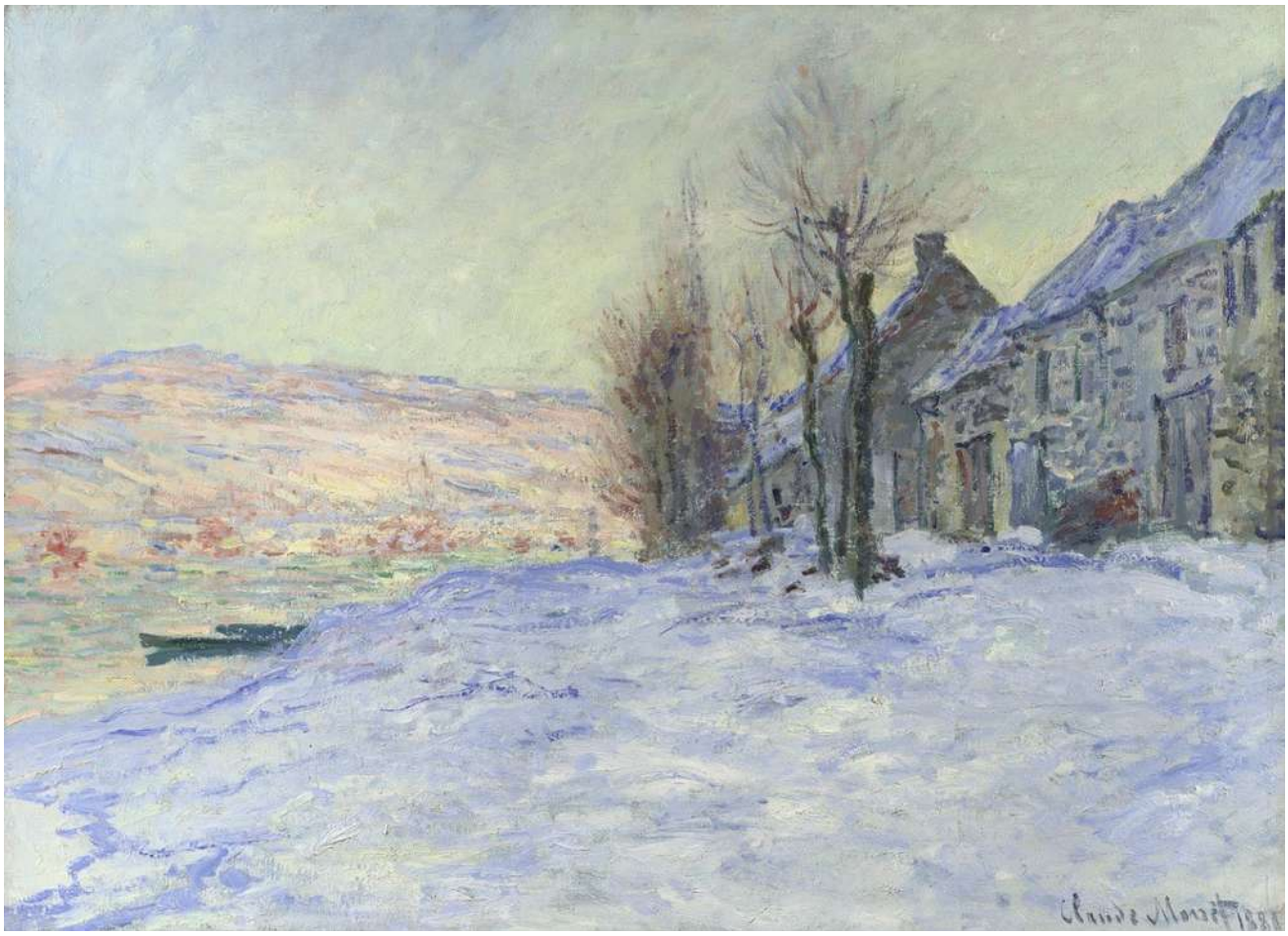
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 177

Website:「発達理論の学び舎」



© YOHEI KATO 2018

目次

3521. 夢の続き

3522. 書籍の再校と欧米で過ごしてきたこの七年間

3523. 書籍の完成に向けて

3524. 記憶喪失とひらがなに関する発見

3525. 記憶と身体感覚に関する夢

3526. 60代からの探究項目と夢の続き

3527. 夢日記・デッサン・作曲の意味

3528. 遊び心について

3529. FCフローニンゲンとサッカー選手の知性について

3530. 台湾と中南米を旅する夢

3531. 夢の観察者及び奇妙な儀式と遭遇する夢

3532. 夢の意識と今朝方の最後の夢について

3533. 新刊書籍『リーダーシップに出会う瞬間』の原稿レビュー完了

3534. 列車に乗る夢

3535. 大手製鉄メーカーの株に投資する夢

3536. 財産としての知識と技術

3537. 曲の構造的なパターンと多調の実験に向けて

3538. 六頭のシャチに遭遇する夢

3539. シャチの夢について思うこと

3540. 夢の世界と旅の世界：不思議なシルエットが整列する夢

© YOHEI KATO 2018

3521. 夢の続き

早朝の静けさを感じながら、ゆっくりと一日の活動を開始させている。探究活動や創造活動に本格的に従事する前に、日記を書き留めておくこと以上に優れた準備はないように思える。書くことは活動に向けた最良の準備である。いや、それは何かを始めるためにあるだけではなく、何かを終えるためにもあるのだと思う。物事を始め、それを進め、そしてそれに一旦の区切りをつけるための役割を書くことは果たしてくれる。今日も一日の活動を始める前に日記を書き、活動の最中にも日記を書き留め、一日の終わりにも日記を書くだろう。

今朝方の夢についてつい先ほど振り返っていた。改めて振り返ると、夢の中でさらに深い意識の層に降りていき、そこから夢の意識に戻ってきたことを夢の中の自分が自覚していたことは興味深い。こうした体験はこれまでなかったように思う。夢の中で眠りかけたことや完全に眠ってしまったことはこれまでにあったかもしれないが、夢の中で寝てそこから再び起きることはこれまで体験したことがないように思える。

感覚として覚えているのは、夢の中で眠りに落ちようとしていた自分は、どこか身体が重たいような感じがあった。一方で、そこから眠りに落ち、再び眠りから覚めると、身体にエネルギーが補填されているように感じたのである。おそらく、夢見の意識状態から夢を見ない深い意識状態に向かうと、そこでは何かしらの治癒が起こるのだろう。まさにそれを体験するような出来事だった。

アメリカの大学院のオリエンテーションに参加した後も、実はまた別の夢を見ていたことを思い出した。夢の場面は最初の場面と同じであり、小中学校時代を過ごした社宅だった。またしても、私は自宅のリビングにいた。ソファに座ってくつろいでいると、玄関の方で父と母が何かもめている。

なにやら、今度の旅行に関して意見が食い違っているようだ。最初私はそのように思ったのだが、ソファから二人の話を聞いていると、どうやら自分の自転車が問題のようだった。旅行に持って行く私の自転車は、子供用の小さなものであり、それに関して何か問題があるようだった。父に話を聞いてみると、「車から自転車の紐がはみ出ることがみっともない」と言う。

私はすぐにその意味が掴めなかったため、より詳しく話を聞くことにした。だが、それはとても些細なことに思え、どうしてそれを元に母ともめていたのかがいまいち私にはわからなかった。

© YOHEI KATO 2018

「紐がはみ出ることが嫌なら、紐が出ないようにしたら」とだけ述べたところで夢の場面が変わった。

今朝はそのような夢を見ていた。今思い出してみても、今朝方の最後の夢の場面は謎が残る。「車から自転車の紐がはみ出ることがみっともない」と父は述べていたが、実はその後に、「周りの車の運転手に小さな子供が車に乗っていると思われたら不都合がある」ということ付け足していたように思う。その言葉の意味も含めて、色々と謎を残す夢であった。

時刻は午前七時を迎えつつある。これから一日の活動を本格的に始めていこうと思う。まずは早朝の作曲実践を行い、そこから作曲理論の学習に入る。フローニンゲン:2018/12/14(金)06:58

3522. 書籍の再校と欧米で過ごしてきたこの七年間

時刻は午前11時を迎えた。午前中に飲んでいる一杯のコーヒーの分量が減り、そろそろ昼に向かっていることを実感する。

つい先ほど、編集者の方から一月末に出版予定の書籍の再校を送っていただいた。再校に対する修正をもってして、こちら側で修正することはもうないようだ。再校を眺めてみると、今回の書籍も非常に思い入れのあるものになったと感じる。再校の修正の締め切りが来週の火曜日なので、今週末は書籍の修正に時間を充てたい。

午前中にふと、欧米で過ごしてきたこの七年間は、どこを切り取ってもとても濃密な時間であるということに気づいた。なぜこのタイミングで七年間の時間についてふと振り返ったのかわからないが、その期間における全ての時間が有意義なものであったと明確に述べることができる。それはとても有り難いことであり、幸運なことだ。欧米で過ごしてきたこの七年間はまだ始まりでしかなく、これからも様々な土地で充実した時間を過ごしていくことになるだろう。

今日も午前中のほとんどの時間を作曲理論の学習に充てている。理論書の転調に関する章は、今日中に読み終えることができそうだ。これまで、ピボットコードを使う転調方法しか知らなかったから、遠隔調へ転調することが難しかったのだという素朴な気づきがあった。また、驚くほどに様々な転調方法が存在することを、書籍を通じて知った。転調方法について一つ一つ理解を深め、特にそれら

を実践の中で活用することによって自分なりの活用方法を確立していくことが大切になるだろう。これから昼食までの時間を使って、再び集中して作曲理論の学習を進めていく。

一昨日より、就寝前に、ピアノに関するMOOCを視聴し始めた。この講義は、プリンストン大学が提供しているものであり、音楽家のみならず、音楽愛好家にとっても興味深い内容だと思う。私はピアノを実際に演奏する気は今のところないが、ピアノ曲を作曲することに特化していこうと考えているため、ピアノそのものについてより深く知ることは有益だろう。今夜もまた、講座の続きを視聴し、ピアノについてまた新しいことを一つでもいいので知りたいと思う。フローニンゲン：2018/12/14（金）11:18

3523. 書籍の完成に向けて

時刻は午後の七時半を迎えた。つい先ほど夕食を摂り終え、ここから就寝までの時間を再び有意義に過ごしていきたいと思う。

今日は午後の三時あたりに街の中心部に散歩がてら出かけた。天気予報の通り、マイナス1度の世界は寒く感じたが、思っていたよりも寒さは厳しくなかった。チーズ屋に行くことしか用事がなかったため、スポーツウェアのまま自宅を出発し、軽くジョギングをしながら街の中心部に向かった。クリスマスが近づいているからか、街の中心部はイルミネーション用の飾りが多くなってきている。

そうした光景を目にしながら再度フローニンゲンの街を眺めてみると、この街で迎える三回目の冬も充実したものになりそうだという予感がした。オランダの冬は長く、ここから五月末まではマフラーと手袋が必要になる。しかし、そうした長い冬ですらも深く味わえるような自分がいることに気づく。今年の冬は本当に楽しみだ。

買い物から帰ってくると、来月末に出版される書籍の再校のレビューを行い始めた。全七章あるうちの二章を今日中にレビューしておこうと思い、最初から一字一句読み始めた。編集者の方からのメールにあったように、基本的に原稿の修正は今回が最後になる。今から再び、レビューの続きを行おうと思う。誤字脱字がないかをもう一度念入りに確認しながら読み進めていく。

昨年の冬に今回の書籍の出版計画を練り、それがもうすぐ形になることを嬉しく思う。協働執筆者の方が書いたストーリーを改めて読み返しているが、何度読んでも面白く感じる。そして、何かしらの新たな気づきがもたらされることにも気づく。同時に、物語そのものが持つ力も感じている。

物語は、いっときの間私たちを日常から解放し、非日常空間としての物語の世界の中に私たちを招き入れる。そこでしか起こりえない治癒と変容作用があることに気づく。こうした点は、表現は違えど、小説家の辻邦生先生も似たようなことを述べていたように思う。いずれにせよ、より良いものを世に送り出すために、ここから数日間かけて、原稿を丹念に読み返したいと思う。この書籍が世に出されることによって、再び何かが動き出すような予感がする。フローニンゲン:2018/12/14(金)19:58

3524. 記憶喪失とひらがなに関する発見

今朝は普段よりも睡眠時間が多く、七時前にゆったりと起床した。今日から二日間の週末が始まる。今週末は、来月末に出版予定の書籍の再校のレビューを行うことに時間を充てようと思う。昨日すでに二章までレビューを行っていたこともあり、今日と明日に数時間ほど時間を取れば、残りの章のレビューが完成するだろう。日曜日のレビューを終えると、そこからはもう基本的に原稿を修正することができない。こうなってくると、いよいよ出版だという気持ちになってくる。

今回の書籍が世に送り出され、どのような反響があるのか今から楽しみだ。今回は単著ではなく、初めて共著を執筆した。来年以降も共著として何か書籍を世に送り出すかもしれない。今そうした話がいくつかある。それが実現するかわからないが、誰かと協働して書籍を執筆することの意義を感じているため、無理のない範囲で来年以降も共著の出版に携わることができたらと思う。

昨夜は就寝前に、ある知人の方の名前がどうしても思い出せないという事態に見舞われていた。その方の名前を思い出す必要性に迫られていたわけではないのだが、ふとその方の顔を思い出したところ、どうしても名前が出てこなかった。そこで、「あかさたなはまやらわ」の行列の一つ一つのひらがなを想起し、そこからあれこれと名前を思い出そうとしたところ、それでもなかなか名前が出てこない。そして、驚いたことに、私は「や行」が言えなくなっていることに気づいたのである。「やいゆ」の後の文字がなんだったか、わからなくなっている自分がいた。「イェ」のような音だったように思ったが、「もしかしたら「あ行」の「え」の音と同じだったかもしれない」などとあれこれ考えていた。

その方の名前を思い出すことを目的にしていたのだが、それ以前にひらがなを思い出す必要性があった。ひらがなを思い出すことを強いられながら、その方の名前を思い出そうとしていたが、結局思い出すことができなかった。そのまま就寝するのが幾分気持ち悪かったため、ベッドから起きて、その方の名前を調べた。「あぁ、そういう名前だったか」と思ったが、妙にその方の名前が自分にとっては馴染みのない新しいものに思えた。

そのような出来事が昨夜あった。今改めてひらがなを調べ直してみたところ、なんと私は「わ行」の言葉を完全に間違えていたことに気づいた。というよりも、わ行には「わ」しかなく、すぐに「ん」に移行すると思っていたのだが、わ行を正しく述べると、「わ・ゐ・(う)・ゑ・を」とのことであった。ひらがなに対する理解が少々薄れてきているようだ。

ここ最近は、作曲理論のテキストが日本語であり、それを日本語でまとめノートを取っているのだが、ひらがなを書く際によく間違えてしまったり、判読しづらい字を書いてしまうことがよくある。まだ欧米では七年しか生活しておらず、これからも日本を離れた生活が長く続くことを考えると、これから自分はどうなっていくのだろうかとふと考えてしまう。フローニンゲン:2018/12/15(土)07:45

No.1480: A North Wind & a Rumbling of the Earth

Today is now approaching the end quietly but at the same time energetically. I'll be able to spend time tomorrow in an energetic way. Groningen, 21:07, Saturday, 12/15/2018

3525. 記憶と身体感覚に関する夢

時刻は午前八時に近づきつつある。昨夜はいつもと同じように10時に就寝したのだが、今朝起床した瞬間に、少しばかり身体に重さがあった。起床直後に呼吸法を実践したり、ヨガを行うことによって、そうした重さは今はない。

今日は土曜日だが、普段と同じように諸々の取り組みに従事していく。ただし、今夜はいつもより早く就寝してもいいかもしれない。睡眠はとにかく大事であり、今後はベッドのマットの質などにもこだわり、良質な睡眠を取ることも考えていく。次回引越しをする際には、それに合わせてマットを変え

てもいいかもしれない。寝具メーカーの東京西川さんのマットを購入したいと考えており、海外に郵送してもらえるのかを次回の引っ越しの際に確認しておこうと思う。

起床してから一時間ほど経つが、今朝方の夢に関する記憶がまだ少しばかり残っている。夢の中で私は、砂利のサッカーグラウンドの上にいた。見ると、小中学校時代の友人がグラウンドを走り回っており、私は彼らと一緒になってサッカーを楽しんでいるようだった。そこではフルコートの試合が行われており、私は後ろに校舎が見えるゴールに向かって攻めるチームの方に参加していた。

最初私は、試合の進行を眺めるだけに留め、それほど積極的に試合に関与することをしなかった。しかし、相手のチームに2点を先制されてしまったため、そこからは少し本気になって試合に関与していく必要があると思った。

二人の友人と私は、適切な距離感を保って三角形を作り、三人で巧みなパス交換をしていった。二人の友人はパスの技術が高かったこともあり、三人でパス交換をしていくと相手に取られることは一切なかった。そして、ゴール前まで迫ったところで、一人の友人が絶妙なパスを私に送った。パスを受けた私は、ゴールキーパーの位置を確認し、ゴールの右隅にパスをするような優しいシュートを放ち、それは見事に決まった。

パス交換をした二人の友人のみならず、こちらのチームの全員が歓喜に沸いている。「ここから反撃を開始しよう」という機運がチームに高まっているのを感じた。しかし私は、本来であれば、一つ前のパス交換がなされた距離からゴールを決められるキックの技術を持っているはずだったのだが、今はもうそれがないことに気づき、少し落胆していた。私はそれを、パス交換をした二人の友人に告げた。

私:「あの頃なら、もっと遠い距離からシュートを決めれたはずなんだけど・・・。しばらくサッカーから離れていたせいかな？」

そのように私が述べると、二人は「気にする必要はない」と述べてくれた。それは励ましの声に違いなかったのだが、私の脳内には過去にできたプレーのイメージが焼きついており、さらには、自分の右足にはその時のキックの感触が残っていた。そこにあるのは、過去の記憶と身体に残る感覚だけであり、実際にそうしたプレーがもはやできないことに対して、やはり少々落胆の念があった。そう

した落胆の念を振り払うように、残りの10分で5点取るという強い思いを持ちながら自陣に戻り、相手チームが再度キックオフをすることを待った。フローニンゲン：2018/12/15（土）08:07

No.1481: The First Snow in Groningen

The first snow came to Groningen last night. Now, I can see a beautiful view covered with snow. I'll engage in today's work, seeing the beauty of snow. Groningen, 08:42, Sunday, 12/16/2018

3526. 60代からの探究項目と夢の続き

一日の取り組みに関する計画について書き留め、夜に見ていた夢について書き留めることによって、一日の活動に向けた準備が整うのを感じる。また、それらのことを書き留めることによって、一日全体が充実したものになることを毎日実感している。

今朝も早朝に日記を書いたため、今日はこれから充実した時間を過ごすことができるにちがいない。そうしたことを確信するまでもなく、もはや無意識の領域で、さらには自分の意識を超えた領域で、その日が充実したものになる力が生まれているように感じる。

今、一日分のコーヒーを作り終えた。コーヒーメーカーがそれを知らせるかのような音を立てた。時刻は8:15を迎え、辺りが少しずつ明るくなり始めている。そういえば、昨夜就寝前に、「死」について考えている自分がいた。

死という現象に対して思いを巡らせることは、欧州での生活を始めて以降多くなっているように思う。死という現象の意味そのもの、さらには意味の変化とそれが人間に与える様々な影響について探究をしていきたいという思いが芽生えている。一つの案として、60代になった頃にでも、米国西海岸の大学院に留学し、そこでトランスパーソナル心理学や実存主義的心理学を絡めた形で、死という現象について探究したいと考えている。アメリカに永住する気はないが、今後もアメリカとは何かしらの縁がありそうだと感じる。

そういえば、今朝方はもう一つ夢を見ていた。夢の中で私は、ある書店の中にいた。そこは、オフィスビルの中にあるような書店であり、大型書店ではないが、フロアはそれなりの広さを持っていた。

なぜだか私は、慶応大学の在学生と卒業生が集まる団体に付き添いをしており、書店巡りに同行していた。

大学を卒業して随分と経つ卒業生もいれば、ここ最近卒業したような若い人もいた。面陳列された本が数多く並ぶある書棚にやってきた時、卒業生のある男性が、「これは自分の本ね」と嬉しそうな表情を浮かべて、その本を手にとってパラパラと中身を眺め始めた。その男性は経営者であり、コンピューター関係の事業をやっているわけではないのだが、その書籍はプログラミングに関するものだった。同行していた在学生の一人が、「すごいですね、OOさんはコンピューターについてもお詳しいのですね」と述べた。

すると、経営者の男性は笑いながら、「いや～、単なる趣味だよ。趣味としてやってきたことが、いつの間にやら、知識としても技術としても高度なものになり、それをちょっと書籍としてまとめようと思ってね」と述べた。すると、その経営者と同い年ぐらいの別の卒業生が横から茶々を入れるように、「コンピューター関係に関する書籍よりも、もっと経営者としての能力を高めて、経営に関する書籍を書いた方がいいんじゃないか？」と笑いながら述べた。

それを受けて経営者の男性は、「そうかもしれないね」と笑いながら答えた。そのようなやり取りが行われた後、フロアの端に向かって歩いていると、そこには勉強するスペースがあった。木製の立派な長机がいくつかあり、そこでは多くの人たちが勉強に励んでいた。私もそこで勉強したいと思い、先ほどまで一緒に同行していた慶応大学関係の団体とはそこで別れた。勉強机に腰掛けた瞬間に夢から覚めた。フローニンゲン:2018/12/15(土)08:32

3527. 夢日記・デッサン・作曲の意味

時刻は午前11時に近づきつつある。外の気温は低いが、今窓を開けて、新鮮な空気を書斎に取り入れている。今日は薄い雲が空を覆っているが、どこか平穏さを感じさせる土曜日である。窓を開けると、小鳥の鳴き声が聞こえてきた。彼らの姿は見えないが、その声を聞く限り、どこか元気そうである。そうした声に励まされ、私も気力に満ちてくる。

外は寂寥とした雰囲気を放っているが、それでいて、どこか心の明るさと優しさを持っているような朝だ。

先ほどコーヒーを飲んでいる最中に、そういえば、今朝方の夢の中で父方の祖母が現れ、何か大切なことを私に告げていたことを思い出した。だが、何を私に告げたのかの具体的な内容についてはもう覚えてない。記憶にあるのは、重要だと思わせる感覚を含んだ言葉を祖母が私に投げかけてきてくれたことだけである。

早朝にバッハの四声のコラールに範を求めて作曲実践をした。以前に比べて、転調の技術を活用することに慣れてきたのだが、その分、ある一つの方法によってしか転調ができない自分がいることに気づく。いきなり調が変わる「突然転調」の技術を除くと──これはこれで、実は各調の特性と転調前後の雰囲気の変化について深く理解しておかなければいけない高度な技術なのだが──、ピボッドコードを用いた転調しかできないことに気づく。

ピボッドコードに何を置くのかによって、さらに技法は細分化され、その中でも私が普段行っているのは、転調前後のキーにおける共通和音を活用したものだということに気づく。これからは、それ以外のピボッドコードを用いた転調方法を試してみたいと思う。

午前中に、作曲理論のテキストを少々読み進め、まとめノートを取っていった。今学習しているのは、教会旋法を用いた曲作りと無調の曲作りに関してである。それらは今の私にとって新しい内容であり、学習するのがとても面白く感じる。午後からは、来月末に出版予定の書籍の原稿をレビューしていくが、それが終われば、引き続き作曲理論の学習をしたいと思う。

そうした学習に加え、日記を執筆したり、もう一度今日は作曲実践も行う。自分にとって曲を作るというのは、夢日記を書き留めておくのと同じような意味があり、さらには内的感覚をデッサンするのと同じような意味を持っていることに気づく。端的には、内側の現象の対象化を通じて自分自身を深く知るための意味があり、同時に内面世界そのものの治癒と変容を促す意味がある。それが結果として、自分の人生を深めていくことにつながっているのだと思う。今日も間違いなく、自分の人生を深めていくための貴重な一日になる。フローニンゲン:2018/12/15(土)11:13

3528. 遊び心について

時刻は午後の六時に近づきつつある。もう少ししたら入浴をし、夕食を摂りたい。

今日はこれまでのところ、とても充実した一日だったと言える。早朝に予期していた通り、今日という土曜日が、一つの大きな充実感に包まれていたと言える。

来月末に出版されることになった『リーダーシップに出会う瞬間』という書籍の原稿のレビューも順調に進んだ。明日にもう一章分、明後日にもう一章分のレビューを行えば、修正作業は完了となる。発売まであと一ヶ月ほどだ。

午前中にふと、今後仮に博士課程に進学し、それを修了したからといって、教授になる必要はなく、博士課程で身につけた事柄を全く違う領域で活かしていくのが自分らしいように思っていた。学術機関における博士課程でのトレーニングは、極めて特殊な知的鍛錬がそこでなされる──少なくとも欧米のそれなりの大学の博士課程では──。そうした知的鍛錬の過程の中で培われた事柄を、学術的な世界の外で発揮することに関心を示している自分がいる。今後、自分が博士課程に進学することがあれば、それは自分の関心を強く引く主題を純粋に探究したいためであって、決して大学教授になるためではない。そうしたことを改めて考えていた。

今日の作曲理論の学習では、調性を脱却した作曲技法について学んだ。一つには教会旋法があり、もう一つには十二音技法がある。両者は共に興味深く、近々実験的にそれらの技法を活用した曲を作ってみようと思う。特に、十二音技法については前々から気になっていた手法であるため、それを活用した実験が今から楽しみである。

理論書の中に、十二音技法の活用ステップが書かれており、それに沿って短い曲を作ってみることを意識する。十二音技法では、ハーモニーに工夫を凝らすことが難しいので、その代わりにメロディーやリズムの工夫をしていく必要がある。ただし、最初からそうした変数に対して複雑な工夫をしていこうとするのではなく、本当にシンプルな工夫を少々加えることにする。そうした実践を積み重ねていけば、徐々に十二音技法に慣れていくだろう。

とはいえ、私は十二音技法で作られた無調の曲をあまり好まないので、この技法を活用した曲を多く作ることは考えていない。ただし、私がまだ聴いたことがないだけであって、十二音技法で作られた曲の中に感銘を受ける作品が存在しているだろう。そうした作品にひとたび出会うことができたら、そこからは十二音技法をより積極的に活用していくかもしれない。

© YOHEI KATO 2018

十二音技法について学びながらふと、遊び心はとても大切だが、技術がない状態で遊び心を作曲の中で発揮しようとすると、おかしな響きになってしまうことが多いことに考えを巡らせていた。これは当然自分の修練不足から起きている。遊び心を真に発揮するためには、その分野における熟達が必要だ。また、スポーツにせよ、芸術にせよ、その他もろもろの仕事において、遊び心の中にその人の個性のようなものが垣間見れるように思う。

心というのは唯一無二の存在であるから、「遊び心」もその人固有のものだと言えるだろう。スポーツや芸術において感銘を受ける瞬間は、そうした遊び心が発揮されている瞬間だと言えるかもしれない。そこに、その人がこれまで積み重ねてきた経験の全て、知識と技術の全て、さらには人格までもが滲み出すように思えてくる。夕食後に参考にするテレマンの曲には、どこに彼の遊び心が隠されているだろうか。それを見つけるのを楽しみに作曲実践を行う。フローニンゲン：2018/12/15（土）18:08

3529. FCフローニンゲンとサッカー選手の知性について

時刻は午後の七時半を迎えた。つい今しがた夕食を摂り終え、これから就寝までの活動に従事していく。そういえば辺りが闇に包まれていない夕方に、通りを走る一台のバスを見かけた。そのバスの表面には、フローニンゲンの街を代表するサッカーチームのFCフローニンゲンのデザインが施されていた。

気がつけばもう今から二年ほど前のことになるが、FCフローニンゲンの選手補強担当者と話しをする機会があった。FCフローニンゲンと私が所属していたフローニンゲン大学の心理学科は協働研究を行っている。ちょうど私が在籍していたプログラムのコーディネーターであるルート・ハータイ教授は、まさにFCフローニンゲンとの協働研究に従事している代表的な研究者であり、ハータイ教授に声をかけてもらう形で、人材選抜に関する研究の小さな学会に招待してもらった。

それはキャンパスから近くの場所で行われたのだが、その学会に、FCフローニンゲンのその補強担当者も参加していた。今となっては懐かしいが、その学会の中で、その方の発表を聞き終えた後に、いくつか質問をした。最後の質問は冗談を交えて、「優秀な若い選手が日本にはたくさんいるので、FCフローニンゲンには是非ともそうした選手を獲得してほしいのだが、その可能性はどれほ

どあるか？」と尋ねた。するとその補強担当者は笑いながら、「オランダ語ができればその可能性は十分ある」と答えた。

その学会のおよそ半年後に、当時ガンバ大阪に所属していた堂安律選手がやってきた。その時の学会での補強担当者の反応を見る限り、日本人選手がFCフローニンゲンにやってくる可能性は極めて低いと思っていたので、堂安選手がやって来るという知らせには、嬉しい驚きがあった。

そのようなことを通りを過ぎ去ったバスを眺めながら思い出していた。それともう一つ思い出したことがある。その補強担当者の話を聞いていると、外国人選手に対しては、サッカーの技術のみならず、やはり知性の高さを求めているように思えたことである。ここで述べている知性というのは、サッカーインテリジェンスのみならず、内省能力や人格的成熟の要素なども含まれる。その補強担当者のプレゼンテーションを聞いていると、選手選考の段階で、随分と科学的な方法を採用していることに驚いた。現代サッカーは、試合中のピッチの上だけではなく、はたまたトレーニングの最中だけではなく、選手の選考段階から科学的なアプローチが採用されているのだと実感した。

私はあまり心理統計的な手法を用いた選手選考に関心はないが、日々のトレーニングにおいて、いかにサッカー選手が知性を高めているのかについて関心がある。その背景には、現代サッカーは素人が見ても一目瞭然のように──優秀な解説者の解説がないと厳しいかもしれないが──、高度な知性が要求されるスポーツになっていることが挙げられる。それはさながら、「走る将棋」「走るチェス」のようにさえ感じる。

ピッチ上の選手の動きは極めてシステマティックであり、そうした規律のある動きの中で、一人一人の選手が閃きや感性を発揮させて、あっと言わせるようなプレーをするのを見るときに感嘆の声が漏れる。少なくともプロサッカーの世界においては、まずはそうしたシステマティックな動きができるだけの知性が選手一人一人に要求されているのだと知る。

それはあたかも、将棋やチェスで言えば、無数の定石を身体を通じて獲得していることが最低限の条件として選手に要求されているかのようだ。これは裏返せば、そうした数多くの定石を獲得してない選手は、少なくともプロの世界、あるいは欧州のトップリーグで活躍することは極めて難しいことを意味しているのかもしれないと感じる。

© YOHEI KATO 2018

そこで私が問題意識を持っているのは、果たして日本人選手はどれほどそうした定石を身体知として獲得しているのだろうか？という点である。さらには、そうした身体知を獲得するためのトレーニングとしてどのようなことが行われているのだろうか？という点も気になる。

正直なところ、詰め将棋のような棋譜の積み重ねが日本人選手には圧倒的に不足していると思うことがある。ゴールを決めるというのを王将を取ることだと考えれば、詰むための手を欠いていることが決定力不足の要因の一つにあるように思えてくる。これは端的には、サッカー選手の知性と密接に関係した話だと思う。詰め将棋のような棋譜、試合中の諸々の動きのパターンがどれだけ選手一人一人に蓄積されているのか疑問に思う。

何気なくサッカーの練習や試合をしていては、プレーの幅は一切広がらず、選手の知性が高まることはない。発達心理学者のカート・フィッシャーの理論にあるように、知性は領域固有性を持ち、私たちの知性は具体的な文脈における具体的な実践によって育まれることを考えると、そうした点を意識したトレーニングが現場に欠けているのかもしれないと思う。

確かに、サッカーにおいてはそれこそ無数の動きのパターンがあるが、得点を左右する決定的なパターンには規則性があり、ある程度の数──それでも膨大かもしれないが──に絞られるであろうから、それらを一つ一つ抑えていくようなトレーニングが必要なように思う。それこそ、新しい動きのパターンに関する観点を一日一つ、ないしは少なくとも一回の練習で一つ身につけていくような意識を持つようにする。そうすれば、一年間で随分とパターン認識が高まり、プレーの幅が広がると思うのだが。サッカーの現場において、「知性発達強化担当」などないのだが、実はそれに類する研究ないしは仕事がしたいとその補強担当者にメールを送ったところ、返信はなかった。

先ほども入浴中にブツブツと、サッカーにおける諸々のパターンについて解説をしている自分がいた。そうした定石を一つ一つ積み重ね、それが試合でうまくいけば、無上の喜びがあり、それがますますその選手のプレーの幅を広げていくことになるのではないかと考えていた。そして、そうした知の積み重ねは後の世代に引き継がれていき、科学的な知の積み重ねと同様に、サッカーというスポーツそのものが発展・発達していく礎になるのではないかと思えた。

© YOHEI KATO 2018

今日はこれから、午後に引き続き、作曲理論の学習を進めていく。2500年前にピタゴラスが誕生して以来積み重ねられてきた音楽理論を前にするとき、サッカーの理論にどれだけの蓄積があるのかやはり気になる。仮にそうした体系が十分にあるのであれば、選手や指導者がどれだけそうした理論体系を汲み取ろうとしているのか、はたまた新たな理論的な功績をどれだけ日本人が行っているのかか気になる。

今すぐにではないが、いつかサッカーの領域にも携わった仕事をしたいと思う。サッカー選手の知性の発達を支援していくための方法に関しては、これまでの発達科学の研究で用いた手法が十分に活用できるだろうし、これまで企業組織と共同開発してきたトレーニングプログラムのアイデアを活用することができるだろう。普段やたらとサッカーをしている夢を見るが、やはり私はサッカーが好きなのだろう。そしていつか、サッカーの分野と携わる日が本当に来るかもしれない。フローニンゲン:2018/12/15(土)20:08

3530. 台湾と中南米を旅する夢

今朝は六時前に起床し、六時半から一日の活動を始めた。早朝起床してみると、窓の外には白銀世界が広がっていた。今年初めての雪が降ったようだ。道路には雪が積もっており、特に歩道の雪はまだ誰も踏んでいないようであり、綺麗なままの雪が残っていた。今日も昼頃まで雪が降る予報が出ている。

昨夜の就寝中に雪が降っていたため、実際に雪が降っていた姿を見ることはできなかったが、今日の午前中に雪が降る様子を眺めることができるかもしれない。その際には、冬の趣を味わいたいと思う。

昨夜は九時半過ぎに就寝に向けた準備をし始め、10時には完全に就寝していた。ベッドの上で横になると、すぐに眠りにつくことができたように思う。

今朝方も印象に残る夢をいくつか見ていた。最初の夢の中で私は、アメリカにいて、これから台湾に向かう予定があった。カリフォルニア州のベイエリア辺りを走っている電車に似ている列車に乗り込み、空港に向かった。列車の車窓から見える景色はどうも西海岸の感じではなく、それはどちらかというとオランダの景色のように思えた。

しばらく列車に乗っていると、無事に空港に到着した。そこで私はアメリカ人の友人と遭遇し、会話をしながらセキュリティーゲートに向かった。彼は左のゲートに向かい、私は右のゲートに向かった。ゲートに到着し、自分のカバンの中を見ると、なんとパスポートが入っていないことに気づいた。

いつも旅行の際にカバンに入れておく場所にパスポートが入っていなかったのである。しまったな、と思いつつも、自宅に忘れてしまったのであるからしょうがない。今後は常にパスポートをカバンの中に入れておいてもいいのではないかと思った。だがそもそも、私はまだ航空券を購入していないことに気づいた。列車のチケットだけを購入して今ここにいることにはたと気づいたのである。これから一旦自宅に引き返し、パスポートを取ってこようと思ったその瞬間に、私は台湾の空港から街の中心部に向かう列車の中にいた。

時計を確認すると、先ほどから一時間しか経っていない。それは時差を計算に入れてのことである。アメリカから台湾まで一時間で行けるはずはないと思いながらも、確かに一時間後に今このようにして台湾にいることが不思議だった。しかし、そうした不思議さを打ち消すぐらいに、私は窓の外の台湾の景色に関心があった。

しばらく窓の外を眺めていると、夢の場面が変わった。次の夢の場面では、私は大型の車の二列目の席に座っていた。運転手を見ると、前職時代のボスであり、車内には一緒に働いていた方たちが数名いた。どうやら私たちは、社内旅行の一環として、中南米を旅しているようだった。

私にとって中南米を旅するのは今回が初めてであったから、窓の外に広がる景色は大変興味深かった。強い日差しが降り注いでおり、季節はまるで夏のようだった。しばらく車に乗っていると、私はすることがなかったので、仮眠を取ることにした。後ろの席では、上司たちが楽しそうに談笑している。その声は気になるほどではなく、私は十分に寝れると思った。

すると、私の意識は断続的に消えては現れを繰り返した。つまり、眠っている意識に陥ったり、再び半覚醒の意識に陥ったりしたということである。しばらくして目を開けると、車が猛スピードで走り始めた。見ると、運転をしていたボスがギアを入れてスピードを上げ始めたようだ。

混んだ街中の道をこのようなスピードで走るのはかなり危険なように思えたが、依然としてスピードが出たままであり、何台かの車を追い越して行った。すると私は、今乗っている車が完全に反対車

© YOHEI KATO 2018

線を走っていることに気づいた。さすがにそれは危ないと思って、私は運転手のボスにその旨を伝えた。するとすぐさま、元の車線に戻ったが、もうしばらくスピードを出したままだった。

あるところで信号機に捕まると、そこからは元の速度に戻った。私は少しホッとして、運転席の横に備え付けてあるオーディオの方を見ると、そこに小さなスーパーファミコンが備え付けてあることに気づいた。私は運転席の方に体を伸ばし、どのようなゲームソフトがあるのかを確認した。すると、随分と懐かしいソフトが揃えてあるのがわかった。

そのうちの一つを手に取り、私はゲーム機の電源を入れ、そのソフトを差し込んだ。しかし、そこで再び睡魔に襲われて、ゲームの電源を入れたものの、私はそれをプレーすることなく、再び眠りの世界に落ちていった。そこからしばらく眠り続け、再び目を覚ましてみると、私たちはブラジルの郊外を走っていた。辺りには農場の姿が見える。

相変わらず眩しいほどに輝く太陽が上空にある。降り注ぐ太陽の光があまりにも眩しかったため、目を開けていられなくなり、私は持参したサングラスをかけた。そして、窓の外に広がるなんとも言えないのどかなブラジルの風景を眺めていた。フローニンゲン：2018/12/16（日）06:53

No.1482: A Starry Sky on the Day of the First Snow

It snowed today, which was the first snow this year. The view was very beautiful. I look forward to the next snow that will come soon. Groningen, 20:50, Sunday, 12/16/2018

3531. 夢の観察者及び奇妙な儀式と遭遇する夢

時刻は午前七時を迎えようとしている。再度、書斎の窓際に行き、窓の外を眺めてみた。すると、日曜日のこの時間帯かつ雪が通りを覆っているためか、誰一人として通りを歩いていない。もちろん、自転車に乗っている人も見えない。確かに、通りを走る車はすでに何台かあったが、どの車も慎重に道を走っている。その慎重さは、どこか教習車のようだ。このように雪を眺めていると、本格的に冬の時期に突入したのだと知る。そこにはどこか感慨深さがある。

また新しい冬がやってきて、新たな春を迎える。冬が厳しければ厳しいほどに、生命力溢れるあの春の素晴らしさを謳歌することができる。オランダで迎える冬は今回が三度目であるから、厳しい冬

にはもう随分と慣れ、特に厳しさを感じることはないかもしれない。一昨年よりも昨年の冬に厳しさをそれほど感じなかったのは、環境への適応が進んだことと、そして自分自身の精神が育まれたからだろうと思う。

心身の適応と、精神の深まりがあったことをそこに見て取ることができる。今年の冬をいかように受け止め、どのように過ごしていくかは、昨年から今年にかけての自己の成熟を確認する試金石になるだろう。

先ほど今朝方の夢を二つほど書き留めていたが、まだその他にもいくつか夢を見ていた。三つ目の夢の中では、私は完全に夢の観察者としてそこにいた。厳密には、夢の中に私がいたのではなく、私は文字通り、「夢を見る者」であった。その夢の主人公は私ではなく、一人の女性だった。

私よりも10歳ぐらい年上の知人の女性が夢の中に登場し、彼女はこれから大事な資料をどこかの組織に届けることになっていた。それはおそらく国家機密に関わるような資料であった。その資料は紙媒体ではなく、USBメモリーに保存されていた。彼女はそれを持って、アメリカから日本に向かおうとしていた。

彼女の様子を観察していると、どうも様子がおかしい。どうやら、誰かに後をつけられているようだ。彼女の後ろに目をやると、無表情な不気味な巨人が立っていた。その巨人にはどうやら感情など全くなさそうであり、何かの目的を遂行するためだけに存在している生き物ように思えた。不気味なのはその巨人の表情だけではなく、その動きも不気味であった。というのも、この巨人は一歩も動かないのだが、次の瞬間には逃げる女性の後ろに一定の距離を置いて立っているからである。

資料を持って逃げる女性は、あるところから飛んで逃げるという選択をした。巨人の目につかないように、できるだけ低空飛行を続け、ある森の上を抜けていき、別の町の上空にたどり着いた時に、さらに高度を下げて、ある工場の中に一旦身を潜めることにしたようだ。それを見届けた瞬間に、今まで観察者であったはずの私が、その夢の場面に突然割り込んだ。工場だと思っていたその場所は、どうやらアメリカの大学の寮のようだった。もうそこには、先ほどの知人の女性も巨人もいなかった。私は寮を後にして、その横に併設されていた食堂に向かった。食堂では何人かの学生が談笑しな

がら飲み食いをしていた。見ると、彼らは立派な成人であり、どうやらそこは大学院生用の食堂だとわかった。

たいていの学生は40代から50代なのだが、その中に私も混じり、一緒に食事を楽しんだ。食後のコーヒーを取りに向かうと、そこでジョン・エフ・ケネディ大学(JFKU)時代の友人であった女性に会った。彼女は当時40代前半であったから、今は40代後半だろう。彼女の容姿に変わりはなく、私たちはコーヒーを片手に近況を話し合った。

すると、先ほどまでは食堂であったはずのその場所が、突然キャンパスのロビーに変わった。そこでも引き続き彼女とお互いの近況について話していると、彼女の友人の学生がやってきた。私たちはお互いに挨拶し、彼女の専攻を尋ねると、音楽と数学だという。その女性が履修しているコースは大変興味深く、詳しく話を聞こうと思った矢先に、その女性の友達がやってきて、今から課題に取り組む必要があると述べた。詳しく話を聞けなくて残念であったが、また機会があるだろうと私は思った。私はJFKU時代の友人の女性と供に、寮に引き返すことにした。

寮の二階に到着し、そこで別れようとしたところ、今日は何か特別な日なのか、それとも誰かの誕生日か何かを祝うのかわからなかったが、彼女が何か儀式のようなことをし始めた。それは奇妙な儀式であり、寮の廊下に一枚の乾いたバスタオルを置き、口に水を少し含んで、それを地面に置かれたタオルにぴゅっと吐き出すというものだった。寮の他の部屋に住んでいる人たちも、部屋に帰ってきた際には、自室に入る前に同様の動作を行っていた。私はその様子を見ながら、なんだか少し気持ちの悪い儀式だなと思った。フローニンゲン:2018/12/16(日)07:20

No.1483: A Clearing Fog

Groningen was covered with a thin fog in the early morning. Now it is clearing off gradually, but today seems to be cloudy. Groningen, 09:18, Monday, 12/17/2018

3532. 夢の意識と今朝方の最後の夢について

先ほどの日記を書き留めてから時間がさほど経っておらず、引き続き、辺りは闇に包まれている。小鳥の鳴き声も聞こえず、暗闇の中に灯る街灯と、街灯に照らされた通りの雪だけがはっきりと見える。

一日の始まりをそれほど感じられない外側の景色を眺めながら、今日が充実した一日になるであろうことを確信している自分がいる。

今日は引き続き、来月末に出版される『リーダーシップに出会う瞬間』の再校のレビューをしておこうと思う。数箇所ほど協働執筆者の方に確認しておく事項が見つかったので、それについては今日の夜にでもメールをしておこうと思う。原稿のレビューに加えて、今日も作曲理論の学習と作曲実践を行っていく。作曲理論の学習に関しては、テキストのまとめノートの作成が佳境に入り、いよいよそれが完成する。

ひとたびノートが完成すれば、そこからは自分のまとめノートを何回も繰り返し読み込んでいく。その際には、ノートに記載されている事柄を全て記憶し、しかもそれが身体知として実践に活用できるぐらいに自分のものにしていく。おそらく、三回か四回ぐらいまずはこのノートを集中的に読み返すことになるだろう。来週中にはまとめノートが完成する予定であり、それをもって英語の文献を読むことを再開したい。

まとめノートを作成するために相当な時間を充てているが、それが完成すれば、そのまとめノートを読み返す時間だけではなく、英語の書籍や論文を読んでいく時間も十分に取れるだろう。再び英語空間に戻れることを嬉しく思う。

今朝方の夢の中でも、特にジョン・エフ・ケネディ大学時代の友人と再会した時には、嬉しさのあまりか随分と英語で会話をしていたように思う。夢の中の自分はどこか英語を話すことを欲していたような様子があり、それはもしかすると、顕在意識下の自分に影響を与えているように思う。

来週からは、再び芸術教育哲学に関する文献を読んでいこうと思う。ここ一、二週間、英語の文献から離れていたこともあり、それは良い休暇の期間になったのではないかと思う。あえて余白を作り、再び探究対象に戻った時には、これまで以上にその対象の深くに入っていくことができるだろう。

それにしても、ここ最近は少しばかり異常に夢を見ているし、異常に夢を覚えている気がする。まるで新たな知覚の扉が開かれたかのようである。夢を見る自己自身の変化と、夢を想起する力にも変化が起こったようだ。今朝方の夢にはいくつも興味深い点があるが、特に夢の観察者から夢の中の登場人物へと移行したことは興味深い。これは、無意識が持つ複数の階層間の移行のように思え

る。階層を降りたのか、上ったのかわからないが、いずれにせよ階層間の移行が観察者としての自己を夢の中の登場人物へと移行させたように思える。

そういえば、今朝方は最後にもう一つ夢を見ていた。夢の中で私は、ジョン・エフ・ケネディ大学時代に住んでいた家のガレージにいた。ガレージのシャッターは閉められていて、ガレージの中は薄暗かった。シャッターの外で誰かが話をしている声が聞こえる。

声の方に耳を傾けてみると、二人の男性が、このシャッターが開かないように外側から何か特殊な加工をしようとしていることを知った。それは私たちのガレージを守るために必要なことであって、悪いことでは決してなかった。

私はガレージの中にしばらくいて、その加工作業が終わるのを待った。比較的すぐにその作業は終わり、私はガレージのシャッターに取り付けられていたのぞき穴から外の様子を見ると、もうそこには作業をしていた二人の男性の姿はなかった。シャッターを少し動かしてみると、作業前とあまり変わらず、これでシャッターが補強されたのかどうか少し疑ったが、特に気にとめることもなく、ガレージを後にすることにした。

ガレージの扉を開け、家の中に入ると、そこにはルームメイトであったスコットがいた。思わず驚いたのは、家の中に無数のアジア人がいたことである。どうやら彼らは皆中国人か、中国系アメリカ人のようだった。スコットに話しかけると、今パーティーを行っているようだった。

するとスコットが、私を皆に紹介してくれるというので、彼はみんなの注意を引くために少しばかり大きな声を出した。だが、パーティーの盛り上がりからから、スコットの声はかき消されてしまい、結局私は、近くにいた何人かの中国人に挨拶をするだけとなった。挨拶を済ませ、二階の自分の部屋に向かおうとしたところ、大量の中国人が二階から降りてきた。彼らは、どうやら私の部屋とスコットの部屋を見学していたようだった。

自分の部屋を見られるのはあまり気乗りがしなかったが、それほど気にすることなく、私は階段を上っていった。そこでも何人かの中国人とすれ違い、そこで二、三言葉を交わしたところで夢から覚めた。
フローニンゲン：2018/12/16（日）07:50

3533. 新刊書籍『リーダーシップに出会う瞬間』の原稿レビュー完了

時刻は午後の七時半を迎えた。つい先ほど夕食を摂り終え、これから本日を締めくくる活動に従事していく。振り返ってみると、今日もとても充実した一日だった。昨夜の夜中に雪が降り、今朝も時折雪が舞っていた。それは今年初めての雪だった。雪が舞う姿はとても美しく、しばし書斎の窓から雪の降る様子を眺めていた。

昼食後にゴミを捨てに外に出た際には、通りに雪だるまが作られていた。そうしたほほえましい光景を眺めながら、ゴミを捨てた。確かに外の気温は低く、凍えてしまうような寒さだったが、もはや自分には内側から沸き立つ充実感が絶えずある。地上に積もった美しい雪さえも溶かしてしまうような充実感が自分を絶えず包んでいる。今日もそのようなことを感じさせる一日だった。

先ほど夕食を摂っている最中に、暗闇越しに窓ガラスに映る自分の姿を見て、我に返った。我に返った瞬間に、本当の自分に一歩近づいたような感覚があった。

私は日常生活の中で、よく我に返る瞬間がある。これは興味深い現象なのだが、特に困惑しているわけでも、自己を見失っているわけでもないのだが、日常生活のある瞬間にふと、我に返るのである。これは厳密には、我に返ったとき、その前後の自己はどこか違う存在としてそこにあるという現象だ。さらに厳密に述べるならば、我に返った後の自己は、先ほどまでの自己よりも一段深い存在としてそこにいる、と述べることができるだろう。夕食を摂っていた先ほども、そうした体験をした。

今日は夕食前に、無事に書籍のレビューを終えた。来月末に発売される、有冬典子さんとの共著『リーダーシップに出会う瞬間』の再校の最終確認を無事に終えた。ここまでのプロセスは思っていた以上に長かったかもしれない。全てのレビューを終えたとき、大きな安堵感に包まれた。

本書の出版計画を練ったのは、昨年の今頃だっただろうか。そのときのことをふと思い出す。あれから少しずつ計画を練り、原稿を完成に近づけていった。それが今こうして形となり、後もう少しで世に送り出されることになった。今回が初めての共著ということもあり、本書もまた思い出深い一冊になるだろう。書籍のレビューを無事に完了したため、明日からは再び作曲理論の学習や協働プロジェクトに力を入れていこうと思う。

今日はこれからモーツァルトに範を求めて一曲作り、残った時間は作曲理論の学習に時間を充てる。そのようにしてこの充実した日曜日を終えて行きたい。明日からの新たな週も充実感に満ち満ちたものになるだろう。フローニンゲン:2018/12/16(日)19:44

3534. 列車に乗る夢

昨日と同様に、今朝も六時に起床し、六時半から一日の活動を始めた。昨夜は雪が降っておらず、通りを確認してみると、一昨日の夜に降っていた雪はもう完全に溶けているようだ。今日は昨日よりも気温が少し高くなるが、あまり優れた天気ではないらしい。今日も普段と変わらずに、自分の探究活動と創造活動に励んでいこうと思う。

幸いにも、昨日の段階で、来月末に出版される『リーダーシップに出会う瞬間』の原稿のレビューが完了した。もうここからは誤字脱字を確認することはない。ここ数日間は書籍のレビューに時間を多く充てていたが、今日からはそれがなくなり、再び他の活動に多くの時間を充てることができる。

今日も作曲理論の学習を旺盛に進めていく。今週末ぐらいからは、再び教育哲学に関する文献を読んでいくことができるかもしれない。

闇の中にポツリと輝く街灯の光を眺めながら、今朝方の夢について思い出している。夢の中で私は、駅のプラットホームにいた。その駅は、地元の駅から数駅ほど離れた場所にある、比較的栄えた街の駅だった。私は実家方面に向かう列車をそこで待っていた。すると、私のそばに高校時代の友人(TK)がいることに気がついた。彼に近寄って話しかけたところ、彼は一瞬驚いた表情を見せたが、久しぶりの再会をお互いに喜んだ。

駅のプラットホームで私たちはしばらく立ち話をしていた。彼も同じ方向に向かう列車を待っていたはずなのだが、彼の自宅へ向かうためには、反対側の列車に乗らなければならないことに彼は気付いたらしく、その場で私たちは別れた。すると、高校時代の別の友人(HH)が私の背後に現れ、突然声をかけてきた。

高校時代の友人:「彼はもっと加藤君と打ち解けたいと思っているようだよ」

私:「えっ、そうなの？」

高校時代の友人:「うん。今度彼と話すときは、進学先の大学について話すといいよ」

そのように友人が述べると、列車がやってきた。それは四両編成ぐらいの小さな列車だった。いざ私が列車に乗ろうとすると、中学時代の友人が二人(SN&MT)やってきて、列車の扉からではなく、窓から中に入ろうとした。実際に彼らは空いている席に窓から飛び乗ったところ、遠くの方で車掌さんが注意する声が聞こえた。

私は開いた扉から列車に乗り、辺りを見渡すと、空席が目立った。私は向かって左手にある空席に腰掛けた。すると目の前には、先ほど窓から列車に飛び乗った二人の友人がニコニコしながら席に腰掛けている。二人とも体が大きく、私から見て彼らの右横に、同じ小中高に通っていた大人しい女子が座っていた。

私から見て一番左に座っていた体の大きい友人が、その隣に座っている友人に向かって、「前髪がうざいよ」と述べた。彼は私に同意を求めてきたので、私は「そうだね」と述べた。そして、私の目の前に座っている大人しい女子に向かって、「そう思うよね？」と私は尋ねた。すると、その女子は微笑みながら無言で頷いた。彼女が頷いた瞬間に、友人二人を含めて、私たちは大きく笑った。すると突然、列車が急ブレーキをかけた。なにやら事故があったらしい。

目的の駅まであと数十メートルほどなのだが、急に列車が停止したため、乗客は一瞬戸惑いながらも、扉を強引に開け、次から次へと列車を降りていった。私もその場で下車し、駅の切符売り場に向かった。そこが目的地であるから切符を購入する必要はなかったのだが、私は切符を買い直し、さらに遠くの場所に向かっていこうとしているかのようだった。ここまで乗車するための切符を駅員に渡し、そこからさらに先へ向かうための切符を購入するために、差額の90円を支払ったところで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/12/17(月)07:00

No.1484: A Drowse in the Icy World

I feel as if today had been a drowse all day long. This reality could be a series of dozes.
Groningen, 20:20, Monday, 12/17/2018

3535. 大手製鉄メーカーの株に投資する夢

時刻は午前七時を迎えた。日の出まであと一時間以上ある。日の出の時間を迎えても、今日は朝日を拝むことは難しいだろう。今は辺りが闇に包まれているため、空の様子は分からないが、天気予報を見る限り、空は雲に覆われているようだ。

今、一日分のコーヒーを入れ始めた。コーヒーメーカーの動く音を聞きながら、今朝方の夢の続きを思い出している。

夢の中で私は、小中学校時代を過ごした社宅にいた。自分の部屋にいて、畳に寝転びながら本を読んでいた。すると、母が私の部屋にやってきて、相談事があるという。母の手には新聞があり、その中の一面を広げて私に見せた。なにやら、ある大手の製鉄メーカーが経営危機に瀕しているらしく、株を一気に市場に放出するらしい。新聞記事の最後には、市場に売りに出した株を公募する旨の文章があった。

母:「これ、どう思う？」

私:「えっ？」

母:「ちょっと面白いなと思って」

私:「この株を購入することが？」

母:「うん。株式投資はしたことないけど、この株はチャンスだなって思ったのよ」

私:「う〜ん、ちょっと記事をもう一度見せて」

そう言って私は新聞記事をもう一度読んだ。確かに、その大手の製鉄メーカーは経営不振により経営者を交代し、現在その株価は過去に例を見ないぐらいに下がっている。だが、その会社が今後どのような経営者を雇い、どのような事業を進めていくかの見通しがなければ、ここで株を購入しても値上がりする保証はないと思った。記事を読むと、どうやら新しい経営者は、米国の名門戦略系コンサルティング会社の出身の人物のようだった。

母は何かと勉強熱心であり、関心を持ったことに対する探究熱は自分と同じようなものを持っている。だが、未知な探究領域に関しては、勉強の仕方が少々おかしいように思うことがある。その証拠に、その新聞の一面記事を熟読したからだろうか、いろいろな箇所にマーカーが引かれているのだが、それらは「その箇所、本当に大事ですか？」と聞きたくなるようなものばかりだった。

いつになく真剣な表情を見せる母に対し、試しに株式投資をする際の基本的な用語について尋ねてみた。予想通り、そうした基礎知識が欠けているようだった。さらに、その大手の製鉄メーカーの経営戦略や経営指標に関する質問をしてみたところ、それらについても全く答えられないようだった。

私:「今の状態じゃあ、投資は厳しいね。単純に勉強不足だと思う」

母:「そう・・・」

母は寂しそうな表情を浮かべた。それを見て私はさらに言葉を付け加えた。

私:「投資に関する基礎用語の習得は投資をしながらでいいと思うけど、最低でもまずは投資先の会社について知らなくちゃね。その会社の今後には期待できそうだから、公募を通じて株を購入するのも悪くないと思うよ」

母:「ちょっと投資をしながら勉強してみるね」

私:「何事も実践が大切だからね。正直なところ、自分であればその会社の株は購入しないと思うけど、最初は勉強だと思って、数百万円か1,000万円ぐらいから投資を始めるといいよ」

私はそのように述べた。私は自分であればその会社の株を購入しないと述べたが、おそらく数年後には今の株価よりも10倍ぐらいには値上がりするだろうと思っていた。だが、数年後に今の価格よりも10倍の値段をつけるものは、他の金融商品を眺めてみれば、数限りないほどあるように見えたため、自分にとっては魅力的な投資対象ではないと思えた。そのように思った瞬間に、先ほどまで読んでいた書籍が、いつの間にか投資の基礎に関する薄い冊子に変わっていた。私はそれを母に渡し、「まずはこれから勉強を始めるといいよ」と述べた。フローニンゲン:2018/12/17(月)07:29

【追記】

そういえば、夢の中で母は投資に関する知識をほとんど持っていなかったのだが、なぜだか「新規公開株式」という用語を知っているようだった。会話の最中に、私が言い間違えて、今回の大手製鉄メーカーの件を新規公開と述べてしまった時、「今回は新規公開株式じゃなく、公募株よ」と述べていたことを覚えている。

No.1485: A Joyful Flower

It seems to me that I have a quiet but joyful heart this morning. Although the outside world looks forlorn, today also will be fulfilled. Groningen, 08:54, Tuesday, 12/18/2018

3536. 財産としての知識と技術

時刻は午後の四時に近づきつつある。もうこの時間帯から少しずつ辺りが薄暗くなっている。

今朝方は、フローニンゲンの街は薄い霧で覆われていた。それが徐々に晴れていったが、今日は曇りのため、太陽の姿を拝む機会に恵まれることはなかった。どこか寂寥とした雰囲気が辺りに漂っている。そうした辺りの雰囲気とは対照的に、今日も充実感を持って活動に従事することができている。

昨日の段階で、来月末に出版される共著『リーダーシップに出会う瞬間』の原稿のレビューを終えたため、今日はその他の活動に従事する十分な時間があった。これまでのところ、特に作曲理論の学習に時間を充てていた。ようやく、調性を脱却した作曲技法に関する章のまとめノートを取り終えた。本章が一番分量の多い箇所であったため、まとめノートを作るのに数日間かかった。

午後の早い段階でその章のまとめノートを作り終え、楽式に関するまとめノートをつい先ほど作成し始めた。テキストのまとめをしていくのは残り数章となり、すでに山場を超えているので、一連のまとめ作業は週末を迎える前に終わるだろう。そういえば、テキストをこのようにまとめていく作業をしたのは初めてのことだと言えるかもしれない。これまでも、発達理論を含めて、自分を捉えてやまない探究領域は多々あったが、それらの基礎テキストをまとめるようなことはただの一度もなかったように思う。

もちろん、それらの関心領域は、具体的な技術が伴うようなものではあまりないという側面が強かったからだろうが、それにしても、今回のように500ページほどのテキストのまとめノートを最初から最後まで作ろうとしている自分の姿を改めて眺めると、自分はそれほどまでに作曲理論を習得したいのだろう。

今と似たような衝動に駆られていたのは、発達理論の学習の中においては、とりわけ発達測定の技術を習得する時だったように思う。あの時は、それこそ発達測定に関するテキストが擦り切れるぐらいに文献を何度も読み込むことを行っていた。当時は、それを用いて仕事をしようなどど思っておらず、はたまた、研究にそれを活用するということすらも最初は考えていなかった。純粋に、発達測定という技術に関心を持ち、学べば学ぶほどに、その奥深さに惹かれていった感覚があった。

不思議なことに、そうしたやむにやまれぬ探究衝動に基づいて探究を続けていると、獲得した技術を用いた研究をふとしたきっかけで始めることになったり、それが日本企業との協働プロジェクトなどにつながっていったという出来事があった。芸は人を助けるのかもしれない。探究と修練によって磨いた技術は自己を助けるのみならず、それが社会に還元できるものであるならば、他者や社会を助けるものになると言えるだろう。

書斎の窓の外を眺め、ふと本棚やソファに置かれた書籍群を眺めると、これらは具体的な物であるから喪失する可能性や奪われる可能性が絶えずある。しかし、自分の内側に獲得された知識や技術というのはそう簡単に喪失しないだろうし、少なくとも奪われることはない。

自らの探究と修練によって獲得された知識や技術は、一生涯の貴重な財産となる。そしてそれは、他者や社会に還元される形で発揮されて初めて真の価値を有するものになるのだと思う。私はまだそうした知識や技術を持たない。そうであるからこそ、これからの30年、60年、90年の探究生活がある。フローニンゲン：2018/12/17（月）16:13

No.1486: A Forlorn Flower

It is 5:30 PM, and it is very dark outside. I can find a flower inside myself, which I hope to be joyous. Groningen, 17:37, Tuesday, 12/18/2018

3537. 曲の構造的なパターンと多調の実験に向けて

今日はこれから、ショパンのマズルカに範を求めて作曲実践を行う。ここ最近ショパンに範を求める際は、ワルツを参考にしていたが、今日はマズルカを参考にしたい気分だ。目の前の薄暗い夕方の雰囲気を反映するような曲ができるかもしれないし、はたまたそれとは対照的に、どこか晴れやかな曲ができるかもしれない。第一小節の第一手目、つまり最初の音の感覚によって曲の大半の雰囲気が決定されるかもしれない。もちろん、作っている最中に感覚に変化があれば、転調などを活用して雰囲気を変えていこう。ショパンの曲を参考にしていていつも興味深いのは、そこに構造が見出しやすいことである。

あるモチーフを持つブロックが後になってそっくりそのまま繰り返し用いられていたり、若干変化を加えて展開されていたりすることが多い。ショパンの楽譜を前にした際の一つの楽しみは、そうした構造的なパターンを発見することである。これから作る曲においても、まずはショパンの楽譜の中に潜む構造的なパターンを把握することから行いたい。

本日の作曲理論の学習では、多旋法（ポリモード）について学んだ。それは端的には、二つの旋法を楽曲内で同時に活用することだが、「知識として学ばないとこんな発想は出て来ない」というような技術だと思った。作曲は本当に実践が何よりも大切なのだが、同時に、作曲技術の諸々の観点を学ぶことが大切だと改めて思わされた。

今日の学習を通じて、多旋法に関しては、「そういう手法もあるのか」という理解レベルに留まることは確かだ。まだそれを実践で活用していないので、それは単に一つの観点として自分の内側にあることに留まる。だが、こうした観点があるとなしとでは、大きな違いがある。多調（ポリトーナル）に関するテキストの説明を読んでいた際に、ショパンのある楽曲の一部が用いられていた。

多調という概念を学ばなければ、その小節内に上部はある特定の調で作られており、下部は別の調で作られているということに気づくのは難しいように思った。もちろん、調の分析を習得していれば、その小節内に二つの調が混ざっていることを見つけることはできるだろう。しかし、多調という概念がなければ、それは作曲者の単なるミスだと受け取ってしまう可能性がある。そうした点において、まずは知識としての観点を獲得することの大切さを実感する。

明日の早朝に行う作曲実践では、早速多調の技術を適用してみようと思う。まだ私は教会旋法に慣れておらず、調を扱う方が容易だろう。また、早朝の作曲実践では、バッハの四声のコラールに範を求めているため、コラールのようにパートが対等関係にある構成の場合、多調が適用しやすいと書かれてあったことも実践を試みようと思った理由である。

多調の効果を強く出すためには、選択する調の差が大きい方が良いのだが、その場合には逆に音のぶつかりが多くなるため、不協和が生まれてしまう可能性も高くなる。最初はあえて隣接する調号のキーを選択しようと思う。明日の作曲実践が今から楽しみである。フローニンゲン：2018/12/17（月）16:32

3538. 六頭のシャチに遭遇する夢

今日も一日が静かに始まった。六時前に起床し、六時半を迎える前から一日の活動を始めた。早朝に天気予報を確認すると、今日は少しばかり太陽の姿を拝むことができそうだ。気温もそれほど低くない。一方で、明日からは一週間毎日雨が降るようだ。この時期のフローニンゲンはこれほどまでに雨が降るはずはないのだが、今年は少し異常気象なのだろうか。いずれにせよ、天候がどうであれ、日々自分の取り組みを前に進めていくだけである。

昨夜、一日が一つのまどろみの中で過ぎ去っていったかのような感覚があった。このリアリティは、まどろみの連続なのかもしれない、ということを考えていた。一夜が明けてみたが、もしかしたら今度は新たなまどろみの中に自分がいるのかもしれないと思う。

今朝方もいくつか興味深い夢を見ていた。最初の夢が終わる瞬間に一度目を覚まし、時刻を確認すると夜中の一時半だった。夢の中で私は、砂浜にいた。辺りは薄暗く、ちょうど夕日が沈んだ頃のように思えた。

目の前に見える海は遠浅であり、どこまでも浅瀬が続いていた。しばらく遠くを眺めていると、突然海の向こうの方から何か大きな生き物がやってきた。見るとそれは、六頭のシャチだった。私は海の中に足を浸けており、確かにそこは浅瀬であったが、完全に陸に上がって、シャチに襲われないようにしようと思った。ところが、時すでに遅しであり、私の目の前にはもう六頭のシャチが迫っていた。

どうすることもできなかった私はその場で固まっていた。私の目の前まで迫ってきた六頭のシャチは、突然ピタリと動きを止めた。

「あれ？」と私は思った。六頭のシャチはなにやら私の指示を待っているようだった。よくよく彼らを眺めると、獰猛な感じは一切なく、とても穏やかで優しい心を持っているように思えた。私の方から彼らに近づき、一頭のシャチの頭を撫でた。すると、そのシャチは喜んでいるようだった。

どうやらこれらのシャチは、私を主人だと思っているようだった。彼らは人間の言葉がわかるようであり、私があれこれと話しかけると、それらの言葉を理解しているように思えた。それぐらいに、彼らの知性は高い。

遠浅の浅瀬の中でも、ひときわ浅い場所を泳いできたあるシャチのお腹を見ると、少し擦り傷があるようだった。無理に浅い場所を泳いでしまったからだろう。私はそのシャチに、「これからは浅い場所を猛スピードで泳がないように」と述べた。すると、そのシャチは、「わかりました」とうなづくかのように、小さな鳴き声をクゥークゥーと二、三上げた。そのようなやり取りをシャチたちとしていると、私の横に、水族館の飼育係のような男性が立っていた。

水族館の飼育係のような男性:「このシャチたちはとても賢いですよね」

私:「ええ、本当にそうですね」

水族館の飼育係のような男性:「そろそろ時間のようですね。彼らを元いた場所に戻してあげましょう」

私:「ええ、そうしましょう」

そのように述べた後、私はシャチたちに元の場所に戻るように合図をした。その合図に加え、私は「またここで話をしよう」と彼らに言葉をかけた。シャチたちは私の言葉を嬉しそうに受け止め、再び元いた場所に戻っていった。そこで一度目が覚めた。フローニンゲン:2018/12/18(火)06:41

No.1487: Spring Water near a Ruined House

I'll go to bed with a meditative feeling. Groningen, 20:47, Tuesday, 12/18/2018

3539. シャチの夢について思うこと

書斎の中に、バルトークの『ミクロコスモス』の楽曲が流れている。短く、そして一つ一つ意味を持った不思議な曲たちが、現れては消えていく。

今日も昨日と同様に、作曲理論の学習に打ち込んでいく。嬉しいことに、昨日の段階でテキストのまとめノートの作成がほぼ完成した。全部で30章近くあったテキストのうち、残るは1章だけとなり、そのまとめは今日の午後の早い段階で終わりそうだ。一つ一つの項目を理解しながらまとめていったため、かなりの時間を要したが、この作業を行って本当に良かったと思う。

これまで音楽理論の基礎が非常に脆弱であり、まとめノートの作成を通じて、知識基盤を少しずつ強固なものにしていくことができたように思う。ここからさらに土台を堅牢なものにしていくためには、兎にも角にも繰り返しの学習が必要になる。

今の私は、理論書の内容を頭で理解しただけであり、それだけでは不十分である。作曲の中で自由自在に知識項目を活用していくことができるためには、それらの知識を身体知の次元で習得しておく必要がある。そのためには、繰り返しノートを読み返し、さらには実践の中でそれらの知識を活用していくことを何度も行う必要がある。まとめノートが完成した明日からは、特にそうした点を意識していく。

ひとたびまとめノートが完成したら、再び教育哲学関係の文献を読むことや、美学に関する文献を読んでいこうと思う。さらには、ミシェル・フーコーやエーリヒ・フロムの書籍を読み返し、教育を取り巻く社会的な構造的病理を考えていくヒントを得ていきたいと思う。

昨夜未明に見ていた、シャチが現れる夢はとても印象に残っている。実は一度目を覚ました時に、寝室の明かりをつけないまま、枕元にあるメモ用紙に夢の内容を走り書きしていた。メモをしておいて良かったと思う。夢の中にサメが出てくることはあっても、シャチが現れるのは初めてだったように

思う。しかも、サメが出てくる夢とは異なって、昨夜の夢の中では恐怖心はなく、シャチとの交流を通じて、自分の心が温かくなるのを感じていた。

それにしても、六頭のシャチたちは、皆とても賢かった。人間の言葉を理解するほどの知性を持っており、こちらの言葉に対して、異なる鳴き声を発していたことを思い出す。彼らが私の言葉の意味内容を意味論的ないし語用論的に理解していたわけではないと思うが、それでも、私の発話から何かしらの意味を汲み取っていたことは確かだろう。私の発話の音が、彼らにとってのある種の音楽のように聞こえており、その音楽全体がどのような感情や雰囲気を持つものなのかを彼らは理解していたように思う。

ただし、それだけではあの夢の中で行われていたようなコミュニケーションは成立しないであろうから、彼らなりの意味の把握方法があるのかもしれない。何かしらの方法で人間の言語の意味を理解する彼らの知性には改めて驚かされる。

時刻は午前七時を迎えつつある。今から一日分のコーヒーを入れ、そろそろ本格的に一日の活動を始めようと思う。今日も気力に満ちており、自分の取り組みが一歩深いところへ進んで行くことを予感する。フローニンゲン：2018/12/18（火）06:59

No.1488: A Wish in the Early Morning

Now it is 8AM, but it is still dark. I wish that sunrise will come after a while. Groningen, 08:17, Wednesday, 12/19/2018

3540. 夢の世界と旅の世界：不思議なシルエットが整列する夢

バルトークの『ミクロコスモス』の最後の曲を聴き終え、スクリャービンのピアノ曲全集を聴き始めることにした。それは12時間ほどの長さを持っている。ちょうど昨日に、スクリャービンが発明した神秘和音について学習をしていたため、スクリャービンの曲を今日聴くことになったのは何かの偶然だろう。

一日分のコーヒーを入れながらふと、夢の世界が日々豊穣なものになりつつあることについて考えていた。夢の世界に出かけていくことが、旅に出かけていくことにますます近づいていく。私は普段、

買い物以外には家の外に出ない。国外で暮らす最大の恩恵は、煩わしい馴れ合いの人間関係がないことかもしれない。そうしたおかげもあって、人に会うことはめったになく、その分自分の取り組みに日々打ち込むことができている。そこでふと、外に出かけて行き、外界から刺激を受ける必要がそれほどないのは、夢の世界を通じて十分な刺激を得ているからではないかと思った。

ただし、話はそれほど単純ではなく、人間はオープンシステムかつダイナミックシステムであるから、外界からの何らかの刺激は内側を刺激する上でやはり必要なものとなる。もしかすると、私は日々、自分の取り組みそのものが一つの大きな外部環境を生み出し、活動するごとにそこから何らかの刺激を得ているのかもしれない。そうした刺激が内側にもたらされ、そこから再び新たな活動が生まれていく。何かそうした循環関係が毎日の中で起こっているように思う。端的には、私は完全に、そうしたフィードバックループの中にいるのだろう。探究活動と創造活動に耐えず従事することができているのは、そうしたフィードバック作用によるものなのではないかと思う。

探究が探究を呼び込み、創造が創造を呼び込む姿を見ていると、それは本当に自己組織化のような運動だと感じる。そうした運動に耐えず従事し、運動の中にい続けていることが、夢の世界にも何かしらの影響を与え、その世界が旅の世界と等しいような意味と刺激を持つようになっていることは興味深い。コーヒーを入れながら、そのようなことを考えていた。

今朝方の夢の続きについて振り返っている。夢の中で私は、実際に通っていた小学校の体育館の中にいた。そこで同じ学年の生徒全員が整列をしている。不思議なことに、縦に何列かを作るのではなく、横に何列か作る形で私たちは並んでいた。

私はちょうど真ん中の列の真ん中に立っていた。とても奇妙なのだが、私の前の数列の生徒たちが、全員シルエットになっており、一人一人が誰かわからないようになっていた。自分の後ろの列はどうかと思って振り返ってみたところ、私の後ろには、学年でもひときわ小さい友人が立っていた。彼はシルエットではなかったのだが、彼以外の人物はやはりシルエットになっていた。

今までは生徒だけを観察していたが、そこから体育館全体を観察してみると、どうも教師の姿は見当たらない。「一体自分たちはここで何をしているのだろうか？」と私は思った。すると、体育館の後

© YOHEI KATO 2018

ろから、何人かの生徒たちがぞろぞろと列をなして入ってきた。体育館にはすでに同じ学年の生徒が全員いるはずなのだが、見ると、後ろから入ってきたのは同じ学年の生徒だった。

その列の前から二番目を歩いているのは女子生徒であり、なぜか彼女にスポットライトが当たっているかのようであり、シルエットたちは彼女の動きに合わせて顔を動かしている。彼女を含めた列の全員が、私たちの一列目の前にやってきて、こちらに向かって立っている。彼らの表情はどこかにこやかだ。そこで夢から覚めた。

夢の中に現れたシルエットが今もまだ印象に残っている。あれは、魂の抜け殻なのだろうか。そして、体育館の後ろから入ってきた人たちは、シルエットたちの魂なのだろうか。そのようなことをぼんやりと考えていた。フローニンゲン：2018/12/18（火）07:25

No.1489: A Crack of Frozen Time

It is 3:30PM. Now I can see the glow of the sunset, which makes my heart warm. Groningen, 15:30, Wednesday, 12/19/2018